

ストーリーの構成文化財一覧表

番号	文化財の名称 (※1)	指定等の状況 (※2)	ストーリーの中の位置づけ (※3)	文化財の所在地 (※4)
①	おおみしま 大三島	国名勝	村上海賊が本拠を置いた芸予諸島の多島美を象徴する景観が残り、村上海賊が氏神として崇めた大山祇神社が鎮座する。	今治市
②-1	おおよますみじんじや 大山祇神社の文化財	国宝・国重文・ 国天然記念物	村上海賊ら海の武将たちは、境内にクスノキが群生する荘厳な雰囲気が漂う大山祇神社を氏神として崇め、武運や海上交通の安全を祈った。名高い武将らが奉納したとされる武具・武器類の中に、村上海賊の武将もその名を連ねる。鎌倉末期の巨大な宝篋印塔は、尾道の大工念心の銘が刻まれ、職人たちの活発な南北の交流を見ることができ、このような芸予諸島の紐帯関係を背景に、村上海賊がこの地で台頭したと考えられる。	今治市
②-2	ほうらくれんが 大山祇神社法楽連歌	国重文(典籍)	戦国時代には、連衆の中に村上海賊の武将たちの名も見え、海賊の高い教養や文化力を知ることができる。海賊たちは由緒ある大山祇神社で自らの思いを詠み連ね、武運を祈ってそれを奉納した。	今治市
③	あまぎき 甘崎城跡	県史跡	中世には、能島村上氏系の今岡氏や村上吉継(来島村上氏)の拠点であった。島全体を城郭として利用した海城で、海の難所とされる鼻栗瀬戸を押さえる位置にある。村上海賊が去った後も、藤堂氏によって近世城郭として改修された唯一の中世海城。	今治市
④	よしつぐ みようこう 伝村上吉継墓と明光寺	未指定	村上吉継の墓と地元で言い伝えられている宝篋印塔が祀られている。明光寺は、村上吉継の居城であった甘崎城の対岸にある「水場」集落にあり、近世初期に甘崎城を改修した藤堂氏がこの地に移したとされる。	今治市
⑤	まさふさ ぜんこう 伝村上雅房墓と禅興寺	市天然記念物	はかたきのうら 伯方島木浦地区にある禅興寺は、能島村上氏の村上雅房の菩提寺と言われる。近くには、樹齢600年を超えるとされるオオクスがあり、その根元に雅房夫妻の墓があったと地元で伝わっている。	今治市

⑥	のしま 能島城跡	国史跡	能島村上氏が居城とした典型的な海城で、大島と鶴島との間の宮窪瀬戸にある。島の頂部から三段に削平して郭とし、東側、南側に延びる鼻の頂部にも出郭を形成した。周囲の岩礁地帯には、護岸や船を繋ぐための施設である無数の柱穴が残る。南北朝時代から戦国時代末期に機能した。	今治市
⑦	みちかじま 見近島	未指定	能島城の北方約 1 km に位置する能島村上氏の物流基地。小規模集落から、大名の城館に匹敵する質・量の貿易陶磁器や備前焼など流通品が出土した。	今治市
⑧	のしま 能島村上家伝来資料群	市有形含む	今治市村上水軍博物館で保管・展示している能島村上家に伝わる資料。全盛期の当主、村上武吉が着用したと伝わる猩々陣羽織や、中世の黒韋威胴丸、色々威腹巻などがある。	今治市
⑨	こうがやしき 幸賀屋敷跡および周辺の 村上海賊関連遺跡群	市史跡	能島村上氏の陸地部の拠点集落推定地。「幸賀屋敷跡」や隣接する「さんの遺跡」では、14 世紀から 17 世紀初頭にかけての遺物が出土し、その背後に延びる丘陵には郭跡が確認され、「宮窪城」と地元では呼ばれている。近くには村上氏の菩提寺とされる旧証名寺跡があり、その周辺には、「かしや(鍛冶屋)」「ばんぢよ給(番匠給)」など城下町を思わせる地名が残る。また能島城対岸には「水場」という地名が残り、能島城に水や物資を供給する拠点であったと推測される。さらに、現在の証明寺および海南寺には中世の宝篋印塔が残るなど、陸地部には村上海賊時代の文化財が色濃く残っている。	今治市
⑩	ともうらぜんぶくじほうきとういんとう 友浦善福寺宝篋印塔および 周辺の中世文化財	国重文(石造 美術)・市有形	村上海賊の前身となる伊予大島の有力な勢力が存在していたことを示す鎌倉時代末期、嘉暦元(1326)年銘が入った宝篋印塔。友浦地区周辺には、鎌倉時代中期の善福寺地藏菩薩立像など、同時代の文化財が多く残る。その沖合には、村上海賊の時代の海城、九十九島城が築かれた。	今治市
⑪	やわたやま 八幡山	国名勝	村上海賊が活動した島々の美しい景観が眼下に広がる景勝地。大島のほぼ中央部にある標高 215m の八幡山の頂上からは名勝大三島、同波止浜をはじめ、瀬戸内海一帯の島々を眺めることができる。	今治市

⑫	伝村上義弘墓と高龍寺 よしひろ こうりゅう	未指定	南北朝時代に活躍したとされる村上氏の伝説的武将、村上義弘の墓と地元で伝わる宝篋印塔とその菩提寺。義弘の人物像は不明だが、南朝方を救った武将として、村上武吉と並んで地元では英雄的存在。	今治市
⑬	武志(務司)城跡と中渡(中途)城跡 むし なかと	未指定	来島海峡を押さえるために築かれた能島村上氏の海城。来島海峡の西側は来島村上氏の来島城が、中央と東側は能島村上氏が分担をして海峡を支配した。1585年、羽柴秀吉の四国平定により、能島村上氏は両海城を明け渡した。	今治市
⑭	来島城跡 くるしま	未指定	来島村上氏の居城であった来島城。島の自然地形を活かして多くの郭が築かれた。島の周囲の岩礁には、無数の柱穴があり、船を繋ぐための施設が充実している。関ヶ原合戦後に廃城となったと考えられる。	今治市
⑮	波止浜 はしはま	国名勝	来島村上氏の居城、来島城を含む芸予諸島の多島美を象徴する景勝地。村上海賊が生きた当時の景観が残る。	今治市
⑯	大濱八幡大神社 おおはま	未指定	来島城の城下町として史料に登場する大濱地区に鎮座する。大永4(1524)年の同社造営棟札は、来島村上氏が来島城に在城していたことを示す初見史料である。	今治市
⑰	別宮大山祇神社拝殿 べっく おおやますみ	県有形	天正3(1575)年に来島村上氏の村上通総 <small>みちふさ</small> が拝殿を修築した大山積神を祭神とする神社。	今治市
⑱	光林寺文書 こうりん	市有形	能島村上氏全盛期の当主村上武吉が同寺に灯籠を寄進したことを示す古文書。	今治市
⑲	国分山城跡 こくぶんさん	未指定	天正12(1584)年に村上武吉が普請(築城・改修)した今治平野の拠点城郭。今治城が築かれるまで機能した。	今治市
⑳	志島ヶ原 ししまがはら	国名勝	かつて村上海賊が眺めた瀬戸内海を象徴する「白砂青松 <small>はくさせいしょう</small> 」の景勝地。村上海賊が普請した国分山城の麓に広がる。	今治市
㉑	今治城跡 いまばり	県史跡	村上氏が去った後、国分山城に替わって藤堂高虎が築いた当時最新鋭の近世海城。来島海峡の地政学的重要性が村上海賊時代から継承されたことを示し、芸予諸島に残った海の人々がこの城を舞台に活躍した。	今治市

②	のま 乃万地区の石塔群	国重文(石造 美術)	村上海賊の時代に発展を遂げる島々をつ なぐ南北の交流の礎となった、鎌倉時代 末期から南北朝時代の石造文化を代表す る宝篋印塔群。かつて「乃万」と呼ばれた 延喜・野間・神宮地域などに多くみられ る。その意匠に芸予諸島を介した職人の 移動の証を見ることができる。	今治市
③	けしま 怪島城跡	市史跡	来島村上氏の家臣である神野左馬允の居 城と伝わる城。小島全体を城郭化した海 城で、島の頂部に郭が形成される。	今治市
④	いんのしま 因島村上家伝来資料群	県重文・市重 文	因島水軍城で保管・展示している因島村 上氏の末裔に伝来する資料白紫緋糸段 緘腹巻 一領、紙本着色村上新蔵人吉充 像 一幅、紙本墨書因島村上家文書 卷子 3巻などがある。	尾道市
⑤	いんのしま 因島村上氏一族の墓地	市史跡	因島村上氏の本拠であった中庄に造営 された菩提寺に、かつて分散していた因 島村上氏一族や家臣の墓とされる宝篋 印塔 18基と多くの五輪塔が裏山の墓地 に集積されている。	尾道市
⑥	青木城跡	県史跡	因島村上新蔵人吉充が向島の余崎城よ り移り居城した。因島のほぼ北端、城は 現在の重井東港を望む小丘陵上に在り、 比較的旧状をよく保った郭が5段重な り、武者走りも残っている。	尾道市
⑦	あおかげ 青陰城跡	県史跡	この城は海城ではなく、戦国山城であり 長崎・青木・余崎などの連絡場所であ った。因島村上氏が戦国大名の性格をも つと、本城の役割を果たすようになった。 因島のほぼ中央部、風呂山と龍王山に挟 まれた青影山頂にあり、三庄方面を除く 島のほぼ全域及び周辺海域が見渡せる 場所に位置している。	尾道市
⑧	長崎城跡	県史跡	因島村上氏の初期の本拠地で、海側には 岩礁ピットも残っている。航路を見張る 重要な拠点であった。因島の南西部、瀬 戸に面した海城であり、背後の丘陵には 荒神山城跡がひかえる。	尾道市

②9	しらたきやま 白滝山（五百羅漢像）	市名勝	白滝山は因島村上氏の村上吉充が青木城を築いたとき、この山を控えの要害として設定し観音堂を造営した。その後、柏原伝六は観音道一観と称し大石仏三尊像や、五百羅漢の石仏工事に着手した。一体ずつ顔が異なる石仏は700体ほどあり、松林と岩石の自然に溶け込んで独特の雰囲気醸し出している。	尾道市
③0	地蔵鼻（鼻の地蔵）、 美可崎城跡	市史跡	美可崎城は、航路に面した海城で、古くから海の関所として機能していた。郭跡や船隠しなども残っている。地蔵鼻は、戦国時代の石造物で美可崎城の武将と船で通りかかった娘との悲しい伝説を残す巨岩に彫られた石仏である。	尾道市
③1	岡島城跡	未指定	港町尾道の玄関口に位置し、かつては、「関の大将」と呼ばれた大海賊の居城であったが、その後、小早川隆景と手を結んだ因島村上氏により、駆逐され、因島村上氏の城となった。	尾道市
③2	よぎき 余崎城跡	未指定	弘治元年の厳島の戦いでの報償として向島を得た村上氏の本拠地として、因島に面した向島南部の半島に築かれた海城である。岡島城跡とともに港町尾道への航路をにらむ重要な拠点であった。郭跡や船隠しなどが残り、また、現在でも当時の姿の美しい景観を残している。	尾道市
③3	むくのうら 棕浦の法楽おどり	県無形民俗	村上海賊が、出陣の時は棕浦で戦いの勝利と隊士の安全を祈り、帰陣の際は勝利を祝うとともに戦没者の追悼を行ったというが、その時の行事が「法楽おどり」の起源であるという。侍らしい軽装に太刀、早駆けの姿勢や跳ぶような動作、六字の名号に大幡など、現在でも続く伝統芸能である。	尾道市
③4	たわらさきしょうあと 俵崎城跡	未指定	村上海賊とともに毛利氏に従っていた生口氏の居館的役割を果たした海城である。当時尾道に次ぐ港町であった瀬戸田を管理していた生口氏によって築かれた。生口氏は、第一次木津川口合戦において村上三家とともに、毛利方の武将に名を連ねた芸予諸島の海の勢力。	尾道市

③⑤	こうじょう 向上寺三重塔	国宝	向上寺は生口氏が創建した寺院であり、室町時代初期建立の三重塔は多島美と調和した美しい景観を形成している。	尾道市
③⑥	ひょうたん 瓢箪島	国登録記念物 (名勝地)	村上海賊がかつて闊歩した島々の景観を代表する景勝地。瓢箪のような形から名前がつけられた。大三島と生口島間にあり、両島の神が島に綱をかけて引き合ったため、島の中央がくびれてしまったというユニークな伝説がある。	今治市・尾道市
③⑦	なみわけかんのん 光明寺の浪分観音	国重文	村上海賊の武将、島居資長 <small>しまずいすけなが</small> が寄進したもので、水軍の海難を防ぐ信仰として、浪分観音の異名がある。村上海賊と港町尾道の関係がうかがえる資料。	尾道市
③⑧	鳴滝山城跡	市史跡	鳴滝山城は、港町尾道の玄関口に位置し、城主宮地氏は尾道の海運を監視する役割を担ったが、鳴滝山城はその後攻め落とされ、城主宮地氏は因島村上氏を頼り、因島に移った。その後、村上氏の家老として、港町尾道の海運力を水軍の交易力に生かし尾道と水軍をつなぐ役割を果たした。	尾道市
③⑨	浄土寺宝篋印塔	国重文	村上海賊が史料上に登場する南北朝時代の宝篋印塔。「越智式」と呼ばれる芸予諸島から今治平野に見られるタイプで、村上海賊時代に発展を遂げる島々を介した南北の交流の礎とも言える石造物文化。それを示す尾道側の代表的事例である。	尾道市
④⑩	ももしま 百島茶臼山城跡	未指定	1504年、因島村上氏の村上喜兵衛義高 <small>きへえよしたか</small> が百島に築いた城。百島は、尾道と鞆の浦のほぼ中間にあり、山陽側の航路の要衝として重要な位置にある。	尾道市
④⑪	ほうらく 法楽焼	未指定	尾道市から今治市にかけて食される伝統料理。起源は定かではないが、法楽焼は、村上海賊の武器「ほうろく」にちなんだ料理で、戦勝の祝いに食べたとも伝わる。	今治市・尾道市

⑫	水軍鍋	未指定	尾道市から今治市にかけて食される伝統料理。起源は定かではないが、水軍鍋は芸予諸島で獲れた海の幸を鍋にしたもので、海賊たちが新鮮な魚介類を船の上で豪快に食していたことに由来するという。	今治市・尾道市
---	-----	-----	---	---------

(※1) 文化財の名称には適宜振り仮名を付けること。

(※2) 指定・未指定の別、文化財の分類を記載すること（例：国史跡、国重文（工芸品）、県史跡、県有形、市無形等）。

(※3) 各構成文化財について、ストーリーとの関連を簡潔に記載すること（単に文化財の説明にならないように注意すること）。

(※4) ストーリーのタイプがシリアル型の場合のみ、市町村名を記載すること（複数の都道府県にまたがる場合は都道府県名もあわせて記載すること）。